

# 世界図書館巡礼

## —東西文化交渉の書籍を求めて(2)—2013年夏欧州訪書記

内田慶市

筆者は、2013年7月27日から9月30日までの期間、関西大学在外研究員（学術調査）としてロシア、ドイツ、イタリア、中国の各図書館での資料収集の機会を得た。今回訪れた図書館の紹介と調査で新しく見た資料について以下少し述べて同学の研究の便に供したいと思う。

### 1. サンクトペテルブルク・東方文献研究所

サンクト・ペテルブルクは、旧ロシア帝国の首都であり、かつてはレニングラードとも呼ばれたロシア第二の都市である。そこはまたアジアとヨーロッ

クの文化の融合した場所でもある。そのペテルブルクのネヴァ川のほとりのエルミタージュ美術館の並びに、「ロシア科学アカデミー東方文献研究所（旧東洋学研究所）」はある。

ペテルブルクはドストエフスキー、ゴーゴリ、プーシキンなどの文豪を生んだ町でもあり、『罪と罰』が書かれた家とか、プーシキンが決闘の前に訪れた喫茶店等名所旧跡も沢山あり、運河巡りもまた楽しいものであるし、ビーフ・ストロガノフをストロガノフ宮殿で味わうのもまた一興である。

現在の所長は敦煌学の研究者であるボポア女史であるが、彼女の執務室はニコライ一世の子息の寝室



東方文献研究所全景



東方文献研究所入口



東方文献研究所内部



東方文献研究所閲覧室



東方文献研究所所長室 (1)



東方文献研究所所長室 (2)



閲覧室から眺むネヴァ川

だったと言われている。また、閲覧室の窓からは青々としたネヴァ川の澄み切った水の流れと行き交う船が見える。

ところで、最近、ロシアでは研究機関の統廃合が行われており、この東方研究所も例外ではないようであり、今後の動静が注目される場所である。

この研究所には中央アジア、シルクロード各地で発見された西夏文字や梵語等の仏教経典や写本類、満蒙関係、敦煌関係の貴重なコレクションが収められており、その規模は世界有数を誇っているが、今回のサンクト・ペテルブルグでの一番の目的はここに収められている「幻の漢訳聖書」を見ることであった。

漢訳聖書の研究はこのところ新しい段階に入っている。それは主に2つの「聖經」の発見によるものである。1つは（私もその現物を初期に見ていた一人であるが）、モリソンが元にしたジャン・バセによる漢訳聖書の新しい2種の版本（ケンブリッジ大学図書館、ローマ・カサナネンセ図書館）の発見、

1つは、これまで「あった」ことは分かっていたが、誰もそれを目にするには出来ず、最近になってようやく上海で見つかった賀清泰（Poirot）の中国語版『古新聖經』である。

ただ、後者の賀清泰のものには、漢語版以外に満州語版と満漢合璧版もあることが分かっていたが、満漢合璧版に関しては実際にそれを見た人はこれまでほとんどいなかったように思われる。

今回ようやくにして、Volkovaの満州語関係マニスクリプト文献目録（*Opisanie man' chzhurskikh rukopisei Instituta narodov Azii AN SSSR, 1965*）などを参考にしてC.11（mms）という請求番号であることを確認して早速閲覧申請。現物を手にした時は思わず身震いした。これがかの「幻の漢訳聖書」の満漢合璧版である。

これについては、金東昭2001（「東洋文庫藏現存満文圣经稿本介绍」『満族研究』第4期）で以下のように説明されている。

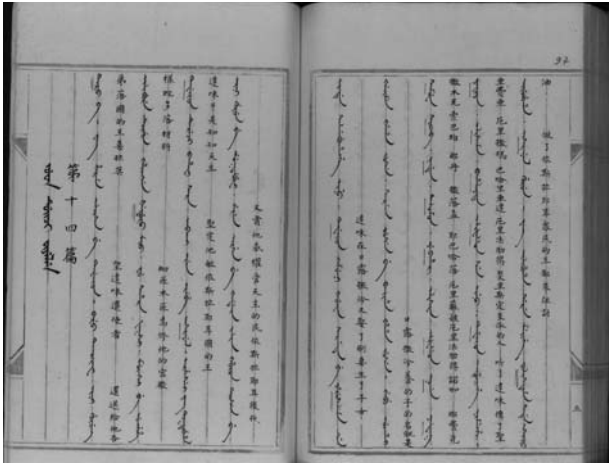
Yudae gurun-I wang sai nonggime sosohon nomun bithe [Paralipomenon libripromi pars secunds constans]

是 Poirot 神父翻译的满、汉文圣书原稿中的《历代经》部分。至于是出自 Poirot 神父亲笔，还是其它人的手笔，则无从考证。这本原稿一册为 100+5 张，各面（页）是 8 行，大小为 34×23、25.5×8cm。现收藏于苏联科学院亚细亚民族研究所。

しかしこの記述には問題がある。

実際には、大きさはこれでいいが、本文は全 101 葉（表紙と白紙の葉の計 2 枚は除く）、各半葉 10 行（満漢各 5 行）である。

金 2001 が何故「各葉（頁）8 行」と言っているの



『古新聖經』 滿漢合璧版



『官語詳編』

かは分からないが、これは Volkova1965 の記述に基づいているようで、案外、金氏は現物を見ていないのかも知れない。

本稿本はいわゆる旧約聖書の「歴代誌上第 13 章 (如達國眾王經尾増的總綱・卷壹下・第十三篇)」から「第 29 章 (第二十九篇)」までが収められているが、その書体は上海徐家匯藏書樓藏漢字本とほぼ同じ筆跡と思われる。また語彙の異同もわずかに見られるが、漢字本の方がより正確である。

こうした合璧版の場合、たとえば『清文指要』等の満漢合璧版では、先に満州語があり、中国語はその訳という形が一般的と考えられるが、この『古新聖經』の場合には、先に中国語があつて、それに対応する満州語が付けられたという可能性が高いように思われるが今後の課題としておきたい。

なお、本図書館には他に満州語版『古新聖經』も各種所蔵されている。

この他に面白いものとして、以下のようなものがある。

C.60 『神 經 撮 節』 (Printed at Serampore by the English Missionarys.)

全七葉、聖書解説本。

C.221 『樂善堂書目』

上海樂善堂主人謹啟

重刊樂善堂發兌書目叙光緒十三年丁亥二月 上海樂善堂書局謹識

D.654 『華英通用雜話上卷』 付『聖經史記』 (耶穌降世壹千捌百肆拾陸年, 江蘇省松江府上海縣墨海書

館藏板) ロバート・トームのもの。

D.624 『舊遺詔書 摩西五經 創始轉 出麥西國傳 利未書 戶口冊記 復傳律例書』

耶穌降世一千八百四十六年, 大清道光二十六年 寧波華花聖經書房刊

いわゆる分合活字の使われたもの。トームの『正音撮要』と同じ

C.723 『官語詳編』

雍正 7 年秋新鑄・袁一州先生較正南北音

本文全 26 葉

これについては、かつて高田時雄氏が「清代官話の資料について」(『東方学会創立五十周年記念東方学論集』1997) で触れられたことがあるが、現物は余り見られない貴重なものである。

C.116 『官音便覽』

同治甲子春重刊、漳浦張錫捷先生著 味根齋藏板

これは法政大学沖縄文化研究所にも所蔵されているが、稀覯本に属す。

E.513 『英話註解』

C.130 上海商務印書館有限公司編印行『中西各種書籍』1906

C.137 上海美華書館『中西教科書目録』1908

C.311 『上海四馬路商務印書館書目第 1 輯』

C.131-133 『商務印書館出版書提要』1906,1908,1909

C.326 『孩童故事』1883

E.611/6,12,13 『小孩月報』1878,Vol.1.No.2,4



## 2. ドイツ・Wolfenbüttel 図書館

ドイツでは今回は特に Wolfenbüttel Herzog August Bibliothek での調査を行った。この図書館は 1572 年に Duke Julius によって収集されたコレクションを元に作られたドイツでも最も古い図書館の一つであり、数学者・哲学者のライプニッツもかつて館長を務めていた(1690-1716) ことがあり、彼の集めた中国書コレクションもある。ゲストハウスも完備していて、1日 15 ユーロ程度と極めて安い。小さな街だが、木組みの家が建ち並び実に風情がある。なお、フェローシップ制度も充実していて、Doctoral で 1 ヶ月 1000 ユーロ、Post-doctoral で 1250 ユーロが支給され、また宿舎も提供される。期間はどちらも 2 ヶ月以上 9 ヶ月まで。興味のある方は是非申請されてみることをお勧めする。

さて、係の人に調べてもらった当館所蔵の中国関係のマニュスクリプトの請求番号は以下のものである。

148.Blank, 148.Blank. I, 148.Blank.II, 148.Blank.IV,

148.Blank.Va,  
148.Blank.Vb, 148.Blanc.VI  
62.2.Extrav.  
91.2.Extrav.  
115.1.Extrav.  
117.a.EXtrav.  
117.1.Extrav.(1)-(11)  
118.1.Extrav, 118.1.Extrav.III  
130.4.Extrav.(1)-(3)

量的には多くはないが、中には面白いものが含まれている。特に、91.2.Extrav. の中には、14 種のマニュスクリプトが入っているが、そのうち(12)は、かつて北京外国語大学の楊慧玲氏が『或問』第 17 号(「德国图书馆中文藏书述要」2009)でその存在を明らかにした「佛郎机化人話簿」、つまり漢葡対訳語彙表(ポルトガル語は漢字で表記される)であるが、実は、その後の(13)(14)も同じく漢葡対訳語彙集であり、しかも量は(12)よりも多く、単語だけでなく、長いポルトガル語の文章も漢字で表されている。



Wolfenbüttelの町並み (1)



Wolfenbüttelの町並み (2)



Wolfenbüttel 図書館全景



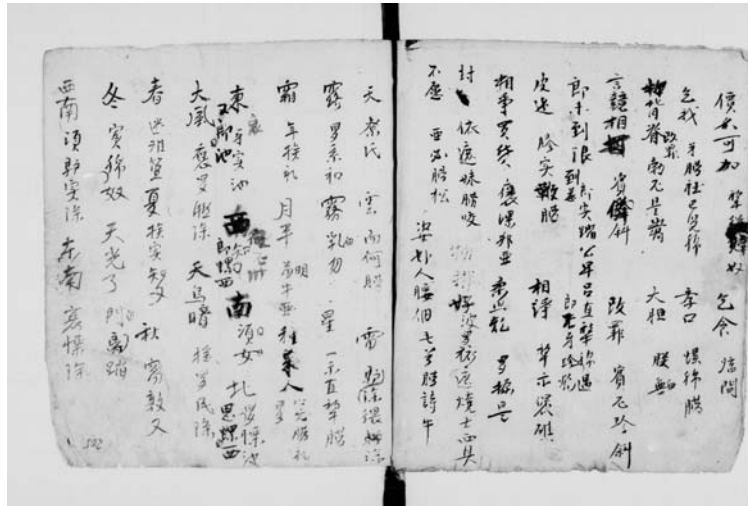
Wolfenbüttel 図書館入口



『佛郎机化人話簿』表紙



『佛郎机化人話簿』



91.2.Extrav. (13) (14)



Klaproth (1)



Klaproth (2)



Christliches gebetbuch





ハイデルベルク大学図書館 (1)



ハイデルベルク大学図書館 (2)



フランクフルト大学図書館インフォメーション



フランクフルト大学図書館commons

この類いのものとして他に、ラテン語—漢語対訳語彙集 (148.Blank.VI) もある。これは漢語だけでなく満州語での注釈もあり、清代のものであるが、クラブロート (Julius Klaproth) のものとされている。

以上の他には、『天主宝義』や『聖教日課』などが、すでに前述の楊 2009 で触れられておりここでは割愛するが、楊で示されていないものに 117.a.Extrav. 「Christliches gebetbuch (天主要理)」がある。

「漢字+音註+ラテン語訳付き」のものであるが、入声表記が見られないことから清代のものと考えら

れる。文白混交体で書かれていて、文体資料としても面白い資料である。

ドイツではこの他に、ハイデルベルク大学図書館、フランクフルト大学図書館を訪れたが、ハイデルベルクの荘厳な図書館には圧倒される。フランクフルトは新しい現代風のものであるが、ここの特徴は大学関係者だけでなく、広く一般に開放していることであり、身分証明書等は一切必要なく図書館に入れるようになってきている。まさに、パブリック図書館である。commonsもごく当たり前に設置されている。

### 3. ローマ国立図書館

ここでは相変わらずマニユスクリプト目録からこれまで未見のものを中心に見ていった。特にここで取り上げておきたいのは次のものである。

Ori.173 『Dizionario cinese portoglese (漢葡字典)』

これは恐らくは Francisco Diaz の手になるものと思われ、これまでほとんど言及されていないものである。

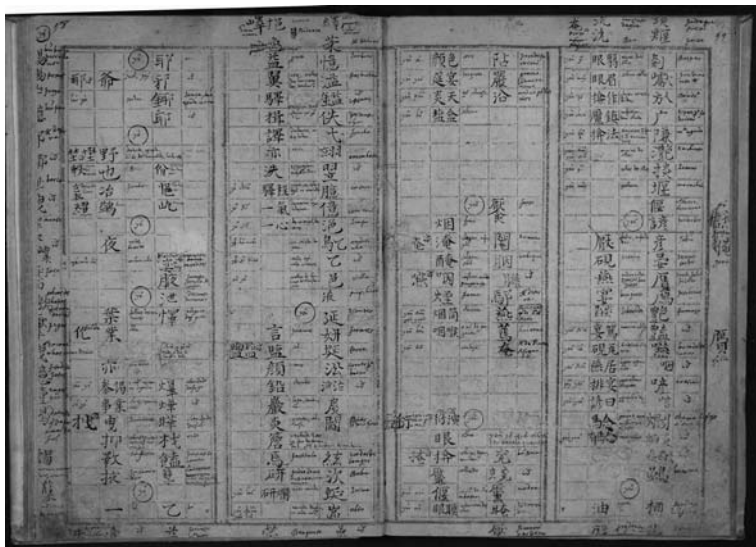
Ori.174 の「Dizionario cinese-inglese (漢英字典)」

も興味深い資料である。

Ori.206 は 1840 年代の南京地区における中国人キリスト教信者名簿であり、中国名、キリシタン名、職業等が細かく音註も付けて記録されている。

Ori.232 『俗言警教』(1852?) は全 50 葉で、孔孟や老荘といった中国古代思想更には仏教などを引きながらキリスト教の論理を説くもので、文体は文白混交体。

この他、手書きの中国語学習ノート類も数多く残されていて、まだまだ見るべきモノがここにはあると感じている。



『漢葡字典』



『俗言警教』

### 4. ローマ・カサナテンセ図書館

この図書館は前号でも触れたが、毎年夏には必ず訪れるところで、係員もさすがによく顔を覚えていてくれて何かと便宜を図ってくれる。

この図書館の漢籍については Menegon2000 (The Biblioteca Casanatense (Rome) and Its China Materials, 『中西文化交流史雑誌』) があって非常に便利であるが、実はこれは完璧ではなくて、現在、ライブラリアンの Dr.Isabella がローマ大学サピエンツァのマシーニ教授の教え子の Davor Antonucci をアシスタントとしてより完全な目録を作成中である。

今回もとりあえずは Menegon2000 を手がかりにいくつか資料を調査したが、以前にも見ていた MS2273 と 2236、2256 について述べておく。

MS2273 にはバセ (白日昇、Juan Basset) の『天主聖教要理問答』が 2 種収められている。この図書館には、上にも述べたようにモリソンが元にしたバセ訳漢訳聖書が所蔵されているが、それ以外に、この『天主聖教要理問答』があったのだ。

かつて筆者はバセ訳に 2 種類あり、カサネテンセ本と大英図書館本の違いは福音書の部分が、前者は普通の聖書の形を取っているに対して、後者はシャッフルバージョンになっていて、それは後者がバセが編纂出版したところがあると記録がある「聖教要理」の類いのものでないかという仮説を立てたことがあるが、それは誤りであることが今回の発見で明らかにされた。バセはこうした聖教要理を実際に作っていたことになる。ただ、カサナテンセ本聖書とこの要理本の字体はよく似てはいるが恐らく別の人の手になるものと思われる。





バセ『天主聖教要理』(1)



バセ『天主聖教要理』(2)



バセ『天主聖教要理』(3)



雍正期口述書

この他、MS2273 で面白いのは、「百家姓帖」「三字経」などの音註付きのものである。こうした音註付きのものは、ローマ国立図書館にも多く所蔵されているし、ナポリの国立図書館やナポリ東洋学校にも残されているが、それぞれの時代の音を反映しており、音韻研究には有効な資料となろう。

『聖教要理問答』は MS2256 にも含まれているが、先の2種とは明らかに筆跡が異なっていて、時代は少し下るものと思われる。

また、この MA2566 には下のような雍正帝の恐怖政治に関連する人物（塞思黒）に関わる文書（宣教師穆景遠の口述書）なども含まれている（同様の文

書は MS2273 にも入っている）。

MS2236 には、Premare の漢拉対照の「心字深義」が含まれている。

ところで、カサナテンセでは、これまでずっと気になっていたことがあり、それを解明すべくかなりの時間を費やしたが結局解決には至らなかった。それはこういうことである。

カサナテンセ版バセ訳漢訳聖書は確かにこの図書館に存在する。そしてこれに関する論考も筆者は以前に公にしている（「モリソンが元にした漢訳聖書—新しく発見されたジャン・バセ訳新約聖書稿本」『アジア文化交流研究』2010）。



このバセ訳稿本の一つがローマの図書館にあることは以下のように、19世紀末にすでに指摘されていた。

The end of the Ming dynasty, and the beginning of the present Ta Ch'ing, were the palmy days of Jesuit missions in China. At that time portions at least of the Scriptures were translated into Chinese and printed for general use. It is not improbable, indeed, that the whole of the Scriptures were translated, though they were never printed, and therefore never got into general circulation. A manuscript copy of the New Testament in seven volumes, now preserved in the library of the Propaganda at Rome, may belong to this period. We could not expect Rome to give her people freely whole Bibles, not even New Testament; but much of the substance of the Gospels, and sketches of the more interesting historical narratives of the Old Testament, were made at different times by different men, and neatly printed and widely circulated. Copies of these, some yellow with age, some later reprints, may still be found in the possession of old Catholic families in Peking. They are written in a simple though not uniform style, much of which differs little from the Kuan - hua of the present day. (Rev. John Wherry 1890, 47p)

(明末清初は中国においてイエズス会が栄えた時代であるが、この時期に聖書の一部は中国語に訳されて、一般の用途のために印刷もされた。もちろん、実際には、あるいは聖書の全てが翻訳されていたのかも知れないが、しかし、それ(聖書の全て)は決して印刷されることはなく、一般的に流布することはなかった。ただ、今、7巻の新約の手稿本がローマの外国宣教師図書館に残されているが、恐らくこれはこの時期のものである。)

実はこの記述は恐らくは Remusat 1811 (*Sur les traductions de le Bible, Mélanges Asiatiques*) が元になっていると思われる。レミュザは、そこで「ローマの Congrégation de Propaganda fide の図書

館に所蔵されている7巻本はバセによって中国語に訳された新約の一部である」と述べているのだ。

では、カサナテンセと Congrégation de Propaganda fide との関係はどうなるかである。

カサナテンセ図書館の稿本はその表紙に「Fattineli 神父の寄贈によるもの」と記されている。Menegon 2000 によれば、カサナテンセに Fattineli 神父によって最初に中国関係の書物が寄贈されたのは 1733 年の 9 月 12 日、2 回目が 1741 年であり、多くのマニユスクリプト (51 巻) が収められたとある。つまり、このバセの稿本は 1733 年、あるいは遅くとも 1741 年にはカサナテンセ図書館に所蔵されていたということになる。

となると、レミュザの見たものはこのカサナテンセ本なのか。すわなち、Congrégation de Propaganda fide 図書館とはカサナテンセ図書館を指しているということなのかである。しかし、この二つは別物であり、Congrégation de Propaganda fide 図書館は今もローマ市内に存在している。

疑問はこういうことである。そこでまずはカサナテンセ本が確かに Fattineli によって寄贈されたものであるかを確認するために、図書館に残されている寄贈書リストを丹念に読んでいった。なにせ、当時のラテン語の手書きによる記録だから骨が折れる。2 日間かけて見たが結局見つからず、最後には Dr. Isabella に助けを借りたがそれでもだめだった。多分、間違いなく 1733 年あるいは 1741 年に Fattineli によって寄贈されたものであるはずだが、では、レミュザの記述はどうなるのかである。ひょっとしたら、もう 1 冊バセ訳稿本は Congrégation de Propaganda fide 図書館に眠っている可能性もあるのだが、今後の調査を待つしかない。

以上挙げたもの以外にも多くの貴重な資料を目にすることができたが、今後折に触れて取り上げていくつもりである。

なお、本稿は「新しく目にした東西言語接触研究に関する資料—2013 年欧州訪書記—」(『東アジア文化研究科紀要第 7 号』2014.3) を元に加筆修正したものである。

(うちだ けいいち 外国語学部教授)